

イ 不然其然(不然其然)と成事在人(成事在人)

Buryeon-giyeon and Seongsa-jaein

研究の概要および目的

- 研究背景

東学思想と大巡思想は韓国近代宗教思想発展の主要な軸であり、両思想の人間観比較研究は韓国思想史理解に必須である。

- 研究目的

本研究の目的は、東学と大巡真理会思想の核心である人間観を比較・分析することにより、各思想の現代的意味を再照明することにある。

- 研究方法

不然其然(不然其然)と成事在人(成事在人)概念を中心に、文献研究と比較分析を通じて両思想の人間観の特性と相違点を考察する。

核心的問い

東学思想と大巡思想において人間の主体性と自律性はどのように異なって表現され、これが現代社会に与える含意は何か。

核心概念紹介:不然其然成事在人

○ 不然其然(不然其然)

現在理解されていない不然(不然)が修道や経験を通じて其然(其然)に転換されることを意味

- 東学思想において人間としては理解が困難な部分も、いずれ修道を通じて理解できるようになるという概念
- 神明界を導入し得なかった東学思想における神人調和の表現方式

👉 成事在人(成事在人)

事の成敗の決定権が天(天)から人間(人)へ移譲された大巡思想の中心概念

- 先天:「謀事(謀事)が在人(在人)し、成事(成事)は在天(在天)」
- 後天:「謀事は在天し、成事は在人」－九天の人身降世以降の決定権の位置変化

💡 核心的差異点

東学思想と大巡思想の人間観の決定的相違は成事在人にあり、これは人間中心の世界観の確立を意味する。

東学思想の人間観

▲ 天外天(天外天)概念

人間を宇宙の中心であり天(天)と直接的に連結された存在と見なす

- 天の外にもう一つの天があるという意味で、人間の変化と可能性を強調
- 人間内部に天性(天性)があり自らが天であることを強調

⇒ 気(氣)中心の思想体系

神明概念より気(氣)と気運を中心とした人間観の展開

- 東学思想では「戦いを決定するのは気運」であることを強調
- 神明概念が現れない独特な人間中心の世界観の形成

“ 不然其然(不然其然)
「人間として理解が困難な不然不然の部分も、いつかは修道を通じて理解できる其然其然となる」

-神明界を導入し得なかった東学思想における神人調和の表現方式

大巡思想の人間観

人間中心の世界観

九天の人身降世以降、天地神明の役割が弱体化され、人間の自律性と主体性が強化される

- 人間を陰陽五行の中心・土(土)として位置づけ、神人調化体系の核心的役割を遂行
- 身内に閉じ込められた神であるため内なる神を覚まし外の神と疎通可能

九天人神降世(九天人神降世)

最高神の人間の身への降臨が人間と神明の位置を変える

- 「神明は否劫(否劫)に陥り人類は災劫(災劫)に陥ったため」、人間中心の世界観を確立
- 人間は神明より身体という実体を持つ点で不完全ではあるが、変化に伸縮的に適応できる長所を持つ

成事在人(成事在人)

事の成否の決定が今や人間によって成される

- 「謀事在天 成事在人」-典経、教法3-35
- 人間を通じて天地が成功する開闢の原理としての神人調和の確立

“「天上の争いが終わった後に人間の争いが決定される」(『典経』教法1-54)から、「今や謀事は在天し成事は在人」へとパラダイム転換

東学思想と大巡思想の比較分析

⚙ 東学思想

神明概念

神明概念が微弱で、気(氣)と気運中心の思想体系

陰陽五行運用

陰陽五行の運用において土(土)が神明の役割を果たす
核心表現

不然其然(不然其然) - 理解しがたいものも修道を通じて理解可能

人間観

天外天(天外天)概念を通じて人間の変化と可能性を強調

● 大巡思想

神明概念

神明と人間の位相の変化を明確に提示

運用構造

人間中心の財貨運用構造の確立、神人調和体系の強化
核心表現

成事在人(成事在人) - 事の成否の決定権が人間にある

人間観

九天の人身降世後の人間の主体性と自律性を強調

核心的差異点

東学思想と大巡思想の人間観の決定的相違は成事在人にあり、これは人身降世以降、天地神明ではなく人間が天下事の主体となったことを意味する。

神人調和と陰陽五行の原理



神人調化の原理

大巡思想で人間(陽)と神明(陰)は陰陽合徳の原理で調和される

- 人間は身体を持つ実体として変化に柔軟に適用可能である
- 神明は真理に至極だが一方向のみを持つ



陰陽五行の作用

金火交易(金火交易):相反する気運(金と火)の交換を通じた調和

- 土剋水(土克水):人間(土)が神明界(水)を制御する原理
- 人間は陰陽五行において中心である土(土)として、神明の気化(氣化)を調理(調理)する



神人調和と成事在人の関係

大巡思想において開闢は天地が成功することであり、これは道通君子の輩出以降に可能となる人尊の道通真境の世界である。神人調化は人間を通じて天地が成功する開闢の原理となる。

人間(土)の条理(調理)と神明の気化(氣化)の相互作用

人間(土)



神明

結論および意義

研究結果の要約

- 東学思想と大巡思想の人間観は不然其然から成事在人へ発展
- 大巡思想は東学思想に比べ、相関的思惟の拡大とフラクタル思惟が強化される
- 人間と神明の位置の変化は九天の人身降世を通じて成される

学術的意義

- 韓国宗教思想の人間観の変化過程の照明
- 神人調化(神人調化)の哲学的意味の拡張
- 近代韓国宗教思想の自生的特性の発見

現代的含意

- 人間の主体性と責任意識の強化に寄与
- 現代社会におけるリミナリティ回復の方案
- 東洋伝統思想の現代的再解釈の可能性

今後の研究提案

成事在人(成事在人)の現代的適用方案と神人調和(神人調和)の実践的意味について、より深層的な研究が必要である。特に韓国宗教思想が持つ東西洋文化の統合可能性に注目する必要がある。

V-4. 東学思想と大巡思想の天地関係の自生的近代性の比較

天地鬼神(天地鬼神)と天地誠敬信(天地誠敬信)
道氣長存(道氣長存)と相生(相生)

研究者:[発表者名]
所属機関]

発表日:2025年6月21日

研究概要および目次

本研究は東学思想と大巡思想の天地関係を中心に、韓国思想史に現れた自生的近代性の特徴を比較・分析する研究である。特に天地鬼神と天地誠敬信、道気長存と相生という核心概念の比較を通じて、両思想の自生的近代性の特徴と意義を考察する。

主要内容

1. 天地鬼神と天地誠敬信概念の比較
2. 東学思想の天地鬼神論
3. 大巡思想の天地誠敬信論
4. 道気長存と相生概念の分析
5. 西洋に対する認識の差異
6. 日本に対する観点の比較
7. 結論および自生的近代性の意義